

三河アララギ

2020年 1月 睦月 むつき

新年号

第六十七卷 第一号



ニューヨーク日記(159) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

BARBUTO

Blue Shoe Diaries



NY長年人気のレストランBarbutoが5月いっぱいまで閉店するらしい。だから閉まる前にもう一回（か二回?）!人気メニュー通り食べてきました!サルサベルデチキン、ケールサラダ（ケールサラダの人気に火をつけたかも）、クリスピーポテト、それに秘密のカルボナーラ。あ〜全部美味しい〜自分で作らないと食べれなくなるう〜

Barbuto, one of NY's beloved restaurants is closing at the end of May. And everyone is really sad! So before they close, I went to have their greatest hits: JW Chicken with salsa verde, Kale Salad (the best one!), Crispy Potatoes, and the off-menu/worst kept secret carbonara. The chef himself was there greeting people.

目次 第六十七卷第一号(通卷七九三号)

表紙・富士山 今泉 由利(1)

ニューヨーク日記(159) Blue Shoe(2)

アカンサスの徑 御津 磯夫(4)

ははきくさII 大須賀寿恵(5)

歌集「續草々」 今泉 米子(6)

はゝきくさII 河原 静誠(7)

木瓜の美 岡本八千代(8)

初舞台 弓谷 久子(10)

仏像彫刻 今泉 由利(12)

絵手紙 安藤 和代(14)

三人家族 清澤 範子(15)

焼け石に水 伊藤 忠男(16)

迷宮 矢崎 直人(17)

礼砲 森岡 陽子(18)

孫の日 白井 信昭(19)

再会 杉浦恵美子(20)

立冬 山口千恵子(21)

教皇 阿部 淑子(22)

日の出 夏目 勝弘(23)

『ことよせ』 いーはとび

山崎 俊子(24)

三田美奈子(24)

水野 絹子(24)

牧原 規恵(24)

稲吉 友江(24)

鈴木美耶子(25)

吉見 幸子(25)

牧原 正枝(25)

石田 文子(25)

森 厚子(25)

現代学生百人一首

東洋大学

平野 薫梨(26)

山口 義仁(26)

小田 千博(26)

原 菜々子(26)

森 はるか(27)

塚田 あこ(27)

関口 佳子(27)

原田 晶平(27)

森岡 陽子(28)

高橋 育郎(30)

田中 清秀(32)

浜田 紀政(32)

重野 善恵(32)

山元 正規(33)

森岡 陽子(33)

松本 周二(33)

山道 京子(34)

今泉 由利(34)

今泉 如雲(34)

植村 公女(35)

杉浦 弘(35)

田中 清秀(36)

かさね吟行会 『酔いの徒然』(93)

楽しい時間(86) 丸山醉宵子(38)

絹の話(110) 山本紀久雄(40)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬 今泉 雅勝(42)

「江上浩二の独り言」 本田 勇氣(44)

漢詩研修(三十九) 江上 浩二(46)

深川界限 平井 茂行(48)

卓上の花を見て感有り 中屋 保之(50)

萬葉秀歌の鑑賞 横山 精真(52)

書齋の窓から 津之地直一(54)

「水魚」のことから(228) 夏目 勝弘(56)

編集室だより(二〇一九年十一月) 岡本八千代(57)

野菜・果物・まんだら(23) 今泉 由利(58)

「三河アララギ」について 野菜・果物・まんだら(23) (59)

森岡 陽子(33) (60)

アカンサスの徑

御津磯夫

おほおほと曇りこめたる不破の山わづかにオキソの白き雪の肩

十六の井は人知らず行きつきて眞清水渡る南宮の麓

南宮の山の大神をくくる水ほそく迅しもなほ清くして

吉野より来ましし御手の玉椿ここにこぼれて三野みのの白玉

とりよろふ三輪の隠居のひとりの庭さもあらばあれ関趾といひて

閉ざされて人人らしめぬ新らし関趾と標す石の杭ひとつ

わが家を夕べに発ちてこまつるぎ和躰が原を指しゆきましき

こひこひしこの国かたちおほよそに雪雲低し不破遠ざかる

松と檜としげれる中に細くして見あぐる白し山さくら花

射し来る光に花のまばゆくて生きてまひるのねむりより醒む

ははぎくさII

大須賀寿恵

わが仰ぐリンゴの木にはリンゴならずのぼりてゆきし夕顔の咲く

黄に実るからたちの垣めぐり来てけふ審査する福岡小学校の門

腐れ落ちてざくろころがる八丁裏曲がれば吾の県事務所なり

渡り板音を立てざる学校を優良校として調査に書きゆく

この母心を千人の児に持ち給へと吾は話の結びとしたり

行政監察庁の指示にたちまち事務室の机はなべてスチールとなる

非常勤者の机は古きままといひて吾が庶務係長出張しゆく

肥満児の指数の出し方聞くのみに遠く茨城の県庁に来つ

朝夕を足萎え吾の渡り越ゆる御津駅のブリツヂ四十八段

京都にて学びし技術に作りしと添へ書をして緑茶届きぬ

歌集 「續草々」

今 泉 米 子

変りなき朝明けにけり枝低き楓を透す朝光にゐる

忘れゆきしところに幾日そのままに青紫蘇の葉と蟬の蛻と

みどり色に染まれるごとき空気あり草蘇鉄群また薺茗荷群

美男葛の下向く淡き白き花年々にして五十年あまり

薬室の窓の下にてひとり生えの白百合ましろ四日保ちぬ

注射筒の消毒を待つ窓の下白百合の実の日々育ちゆく

忘れぬし思ひは返る草庭の夜露にしげく啼くくつわむし

ほのぼのと楽しきごとし掌ての上のみどり滑らの木瓜の実二つ

盂蘭盆の過ぎてしづまる参道に枝垂白梅の青き葉の散る

わが置きし青き木瓜の実に並べあり巨き松毬と朱き柘榴と

はゞぎくさII

河原静誠

夜をこめてまとめあげたる一枚の保育資料をまたよみかへす

夜もすがらまとめあぐみし問題児の一年の記録をプリントにする

額田王のわたつみの歌くりかへしくりかへしおもふ今日の保育に

目高追ひてずぶぬれになりて来し園児吾が前にあり今朝の保育に

猿まねにひとしく踊る園児らに拍手をもとむる保母吾の声

幼らはブランコ毛虫とうたひいふ桃の小枝より垂りてうごめく

家庭訪問にわがめぐりゆく家毎に内職に剥くむき海老臭ふ

園児らと手をつなぎゆく畑道に撒かれて臭ふむき海老の殻

「雀おどり」の輪の中にをり足萎の弘子はをどるたのしげにして

園児らを送りて過ぐる引馬野に石文の萩寒の芽をふく

木瓜の実

蒲郡 岡本八千代

木瓜の木に木瓜の実一つ生りにけりああ父と夫の愛せしこの木瓜

木瓜の実に今日は今日の陽が当たり一日づついちにちの深みある黄色

「おいと声をかけたら返事がない」草枕思ひだすかなこの木瓜の実に

手にとりし「漱石雑記」の本開くその時光れり天金の金

よこしま横縞の布の表紙の「漱石雑記」定価貳円の小宮豊隆の著

昼めしをすぎてひととき庭に佇つたゞ茫然とたゞ漠々と

一夜にて木瓜の実落ちてしまひをり探し探して草むらの中

木瓜の実を拾ひきて一日絵にも描き眺め眺めて少しく俵はせ

いつしかも木瓜の黄色に皺しわも寄り人間と同じと思ひつつ机上に

文明先生御津先生よりのダチュラ咲く夏より秋に五回目の花

いつしかに志賀山寺萩こがね黄金色にゆれてゐるかな夕日落ちつつ

人生と短歌を重ねて思ふことなきにしもあらずわたくしのこと

籠り部屋にこもりてゐれば聞こえるしばらく強さき小夜さよしぐれかな

はやばやときのふ着しドレスしまひたるに心安けく雨音をきく

明日あすの日も己れの有るを信じつついつまでか聞くこの小夜しぐれ

初舞台

豊川 弓谷 久子

流れ来る祭囃子に故郷の秋の祭りが心をよぎる

幼なき私の初舞台なりき境内の仮設の小屋の村芝居

村人が並ぶ舞台は由井ヶ浜素人歌舞伎の晴れの姿ぞ

花道を走り出て来て見得切りし子役の我は曾我五郎役

澄み渡る空見上げたり秋の空かすかに白し真昼の月が

移り来て今日は百日目穏やかなくらしの中に日はたちゆきぬ

敷き呉れしホットカーペット寒がりの二匹の猫が占領しをり

子と孫と久びさ昼の食卓かこむ心和みて満ち足りてをり

今はもう子にしてやる事何も無し弱りし足を踏みしめ歩む

パンジーの苗が並びしプランター春まで咲き継ぐ花楽しまむ

霜月とは名ばかりの日和日向にて暫しまどろむほっこりと

岡崎の東公園へ出掛け行く子は恒例の紅葉狩りにと

散り残る紅葉が池に映りみし奈良東大寺が心に浮かぶ

この雨のあとは寒さが来ると聞く電気毛布の出番となりぬ

腰に貼るカイロのぬくし少しづつ庭片けむ師走真近し

仏像彫刻

東京 今泉 由利

尊くして最高のものを表はする語源もちをり檜の材を

ヒノキ科ヒノキ属にて常緑の針葉樹なる材より始む

歴史上の人物であり命の尊厳説かるる人を釈迦如来彫る

檜なる角材よりかはじまりぬひと彫りひと彫りひと彫りひと彫り

二千六百年程前の世に思ひを馳せるフイトンチットに安らぎにつつ

一彫り一彫り一彫り毎に香りたつフイトンチットに守られるたる

一彫りを一彫りつつを無限とも重ねる重ねる釈尊に会はむ

釈迦如来像彫りあがる十二月八日あたかも釈迦の臘ろう八会はちえ

たおやかに母に似てゐる面持ちに釈迦如来像出来あがる

いつもではない心持ちしてをりぬ釈迦如来像加はる部屋に

綺麗だね綺麗だねと誉めながら桜紅葉の散り敷く道を

ひとりゐる部屋を満たして吟ずるは「自画に題す」漱石忌

権現の山の急坂駆け下りて今日の一日はじまりてゆく

四百年をここに立たれる地藏尊今朝の私の「行って参ります」

羽を持つ山百合の種はどこへやら種鞘乾きて直ぐと立ち立つ

絵手紙

豊川 安藤 和代

朝刊に今日の運勢読みてから始まりますよ私のひと日

たくましや嵐に負けず小菊咲きその一枝を夫に供えん

電話あり便りもありてアララギも届きてけふの風さやかなり

友からの絵手紙栗に柿芋と切手も萩咲き秋がいつぱい

過ぎし日の喜び集めて数いくつ心ほっこり今日を生きゆく

残り野菜卵とじして一人居の昼餉楽しく犬とわけ合う

大工等の声とび交いて木づちの音高らかにして隣家上棟

吾が悩み悩みのうちに入らぬと教えられたり今日の青空

子も孫も健やかなればすべてよしこの年も又パンジー植うる

子のくれしふかふか布団にくるまれば今宵も楽しき夢など見るらん

三人家族

春日井 清澤 範子

春日井市クリーン作戦の当日なり吾杖を持ち柿の葉を掃く

心不全になりたる夫は診察にて直ちに入院なり手続きをする

整形の医師は心不全の方が大事だから出しある薬は止めてください

病院の三科に通う体なり娘の意見に吾は従ふ

家の行事三人家族に暮し来て一人欠けても淋しさつのる

初冬の風強く吹く日は隣り家の柿の葉バラの花びら吾が側溝に

隣り家の柿の葉バラの花びらが散るも掃くのは吾の仕事に

シルバーカーを押してひがしがた東方公園に来ぬ鳥の声聞き暫し休みぬ

百日紅吾の背程に茎伸びて東西南北紅の色

シルバーカーにばかり頼りてゐる吾ぞ今日は杖つき公園巡る

焼け石に水

大阪 伊藤忠男

水しぶき上げる舳先に願掛ける
私の難儀は天の指図か

万難を排し自由で開かれた国の取り引き
これを守り元

スランプか思い考え定まらず止むの待つのか
我が雨季の時

自家泉に身体委ねる今の今木枯らし吹くも至極の時か

規則的並ぶ街路樹御堂筋今年もやつと秋色になる

高潮に津波洪水酸性雨暮らしを奪うこれも水なり

生きる水見る水飲む水浸る水暮らしと命支えるが水

見た見ない言った言わないしたしない決まり文句も聞き飽きるなり

対馬海一衣帯水わずかとて大洋超える隔たりがある

「適切」に廃棄したので分からないこの語句孫に何と教える

あれこれと怒り腹立つ今の世に何とて言へど焼け石に水

迷宮

東京 矢崎直人

冬の日や原宿アートヴィレッジの迷宮の中祈りの光

イラストの似顔絵リユック描きくれし詩集に我の新たな一面

天狗にもでくわしそうなビルの森スマホ歩きはゾンビの群れか

会いたいと会いに来られし友たちに混じりてすするうどん一杯

座の文化俳諧連歌寄席高座情の形のみせる幻

ひもじさや人には言えぬ胸の内漱石寄席に耳目寄せたか

テレビ寄席ラジオ対談松之丞八面六臂の大活躍

噺家の語れる古き語りにも現在生きるわが胸を打つ

師と弟子の眼鏡の取り方似たりけり新宿末広講談の夜

赤穂義士四十過ぎねば語れぬと神田松鯉長講十夜

礼砲

東京 森岡陽子

皇居より礼砲響く空高し即位の礼の慶事の響き

秋日和並び並びて約二時間博物館の正倉院展

飛行機が一機我ケ家の上を飛ぶコース変りてうるさくなりぬ

穏やかな散歩日和と我は決め二駅先の八百屋まで行く

令和なりティアラをつけた七五三ロングドレス手に千歳飴

公孫樹葉の散り敷く校庭冬はじめ臭で主張銀杏も混じる

小春風ベンチにすうつと軽やかに御結び食べ食べ昔話し楽し

ひたひたとひたひた迫る冬気配布団はぐ時犬は寝たふり

二の酉に大きな熊手担ぐのは風舞う中で揺れるきゃしゃな人

孫の日

豊川 白井 信昭

堤防下ひと続きにしてコンテナの移動終へたり貸駐車場

家近く鮎の養魚場隣田に拡張工事早くも始まる

埋め立ての大型ダンプカーわが角を日に幾度も曲がりゆくなり

神無月スーパ^{かみなづき}ー台風十九号はや梅田浜に白波たてり

十九号伊豆半島ぬ^{ひんがし}け東へ我ほつとしたりテレビの報に

朝起きの台風一過の居間の前ピーマン一本無事に安堵す

宮浦の行在所跡に三河なるアララギのこの創立碑

ここよりは近く遠くに御津山^{みと}御堂山また宮路山見ゆる

カレンダー二十日の日曜日「孫の日」と妻と買いゆく匠真の着物

孫の日の待ちゐたる今宵ようやくに家族五人の食事整う

再会

蒲郡 杉浦恵美子

もう冬が其処まで来てるこの時期に無数の羽虫微かないのち

水曜に電話貰って土曜には席に着き居り教へ子の同窓会

五十歳の働き盛りも我が眼には毬栗坊主やかしまし乙女等

面影はかすかに残れど三年間触れ合ひしことどれほどありや

勉強が出来たかどうかそんなこと覚えてないわ自称ワル達よ

もしかして我こそ彼等に活かされて居たのかも知れぬ教へ子達に

三十年我が身の上も彼等とて茫茫たれど再会や宜し

同窓会還らぬ昔を否応なく悟らされしぞ二時間余り

蜂屋柿求めに豊田足助越え瀬戸越え二時間美濃加茂に着く

見事なる色とかたちの蜂屋柿食指動くがこれは洪柿

立 冬

豊川 山口千恵子

山羊二匹草地に飼へるかたはらにキャンピングカーいつも止めあり
積み上げしゴミの袋の上に置く運びてきたるわれの一つを
ねむられず眼とじていたりけり犬の鳴き声いつしかやみぬ
庭になくコホロギの音きこえくるとぎれとぎれに二階の部屋まで
あざやかに日だまりに咲く黄の花立冬今日の石路の花
道畔の穂草を手にてしごきつつハガキ一枚持ちてポストに
収穫のすみたる田の道すいと電動アシスト自転車はしらす
黄葉する大豆の畑に雨の降る静かに待てりとり入れのとき
もう一度切手確かめ投函す今日より値上げの郵便料金
何鳥かわからぬ小鳥の囀りが朝の窓辺にしきりにきこゆ
音羽川塞き止められて水ゆたかさざ波立つをしばしみて立つ

教皇

横浜 阿部 淑子

教皇は核を持つこと即罪そくなると世界に向かい窘め給うたしな

招き受け連なる写真進み観て掛川山車の車輪の迫力

「日本の歌」古賀メドレーで若手歌手主を敬いて熱唱続く

体操で筋力保持し着々と転ばぬ先のフレイル対策

妹より届く柿の実秋の艶「カゼ引かないで」添ひとうる一筆ふで

老の身を子に従いて遠き地に別れゆく友ハグ解きて涙

日の出

豊川 夏目勝弘

今はもう太陽沈すめば布団に潜る眠ることを最上として

日の出もて起き出で夕べに床に入る縄文人のDNAを持つ我も

縄文の人と同じのDNA現在この身に最適なこと

いと激しく降りくる雨にしんしんと音なく暗し背戸の桧原は

庭隅にこんもり繁れるアジサイに打ち降る雨の音の大きさ

水飲めばトイレの回数多くなるこれも運動と水素水飲む

起き出でて先ずトイレに歩くこと歩むことには金はかからぬ

百歳まで生きてどうするされどされど生きてみなければわからないこと

今はただ歩き歩むを第一と歩めば前に進みてゆける

還暦を過ぎて早や二十歳大還暦といふ言葉ありぬ

『いよよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

鈍色の海に小雨の降りつづき水輪いくへもひろごりてをり
海の辺にデイゴの赤き花咲きをり遠き国への思ひは重なる

山崎 俊子

台風一過すみわたりたる中空にわが岬より富士の姿よ
即位礼テレビに観るけふ薫りをり襲かさねの色なる藤袴の花

三田美奈子

この坂を登りし時のかの時の人々偲ぶ今日金毘羅参り
命賭け嵐の間にも集く音ねよ聴きつつ思ふかの時のこと

水野 絹子

月もなく真暗なる空にいくつかの行くか帰るのか光の点滅
対岸の一際際立つ明かるさよわが故郷の豊橋の灯か

牧原 規惠

いつしかに守宮の姿も見えずして我が窓辺には秋風吹き来
「ゴットン」と製氷の音のみ聞こへ来る午前〇時の夜のふかみよ

稲吉 友江

つゆ草のはびこりてをりわが駐車場この青き花そつとしておく
遠白き海を見てをりこのホールにただぼんやりとひとりのわたくし

鈴木美耶子

くつきりと棚引く山よ富士山よわれ見詰めぬる新幹線の中
目前に二重橋をわれは見つ験とぢれば令和の輝き

吉見幸子

「台風は家族揃って夕食よ」楽しげなるは娘の電話

牧原正枝

「倒します」研磨に麻酔掘削と歯科医の椅子に息もそこそこ

畦ごとに田んぼの色の鮮かに緑黄色みどりきいろと秋深まれり

石田文子

すず虫の羽根すり合せりーんりーんと台風一過のこの夕べかな

リフォームのわがりピングに陽のさして窓辺に寄れば山の背の見ゆ

森厚子

無心にて太極拳を舞ふわれにキンモクセイのほのかな香り来

現代学生百人一首

東洋大学

教科書で「バブル崩壊」見た母が「それもう歴史？ママには最近」

流山市立東部中学校三年（千葉県）

平野 薫^か 梨^{りん}

空っぽのおばあちゃん家の犬小屋で夏に来るたび白い尾探す

麗澤中学校一年（千葉県）

山口 義 仁

白米を三号炊いて食べ尽くす祖母の作った秋刀魚の酢漬け

開智日本橋学園中学校三年（東京都）

小田 千^ち 博^{ひろ}

静寂の虫も動けぬ朝勤行いのる声のみひびきわたってる

学習院女子中等科二年（東京都）

原 菜^な々^な子^こ

数学を教えてもらうその代わりバツハのカノン君に聴かせる

吉祥女子高等学校一年（東京都） 森 はるか

朝起きるただそれだけではしゃぐ犬私はいつから変わったんだろう

慶応義塾中等部一年（東京都） 塚田 あこ

歩道橋そこまで高さ感じないけれど感じる「津波ここまで」

慶応義塾中等部二年（東京都） 関口 佳子

父と行く水害被災地ボランティア俺でもできた小さなちから

国土館中学校二年（東京都） 原田 晶平

しよ

へい

贈呈誌

森岡陽子

鹿児島アララギ 11月号

○いつせいに彼岸花の紅咲き揃ふ山あひの田に渡る風さやか
浜畑松枝

○真向ひの空は火山灰に覆はれてたちまち降り来る吾家の上にも
森枝むつ美

○鳥等のさわぎ食みたる柿も尽きやうやく秋の深まりてきぬ
奥悠子

○吹く風に倒れし庭のホトトギスさびしき花と思ひつつ起こす
市来葉

冬雷 12月号

○秋風と共にトンボの数は減り垂るる稲穂に空寂しかり
三木一徳

○或る時は独りを寂しみ或る時は独りに安らぎ老い重ねゆく
橋本佳代子

○元禄に建立されたる仁王堂の余材で作りし大数珠みごと

吉田綾子

○「ぎゃつ」と太き声に振りむけば大白鷺は川にあり立つ

山田和子

○寺庭に稚児の地藏の安置さるあやめられしも許すかに笑む

大塚照美

○夕映えのうろこ雲追い歩む道気づけばわが影長く伸び行く

横田晴美

○山なみの間より湧きくる雲の帯しばし流れて西空に消ゆ

山口嵩

○長くながく連らなる鳥の幾筋か宗谷海峡の波摺りて飛ぶ

稲田正康

○倒木を前にし語らふガイドより沁み沁み響く山への愛は

及川智香子

○茅原の何処へ続く獣道呼ばれてみたし狐のむかさり

小林貞子

○秋あかね頭上をとべり空中に停まり向き替え飛行すばやし

児玉孝子

狐の行列

高橋育郎 作詞

こんもり小高い 丘の上

稲荷明神 ありまする

おぼろの月の うす明り

狐の鳴く声 きこえます

お宮の森は なぜかしら

夜な夜な狐が 寄ってくる

幸せ祈るか 灯をともす

夢まぼろしの 浮世絵よ

ゆく年くる年 ありがたや

子狐嬉々と 頬染めて

花柄模様 に 帯を締め

うれしはずかし たわむれる

来る年迎える 狐たち

祭り提灯 にぎやかに

向こうのやしるへ ゆらゆらと

行列そろえて 行くわいな

『俳句』

冬ぬくし定印結ぶ如来像

田中清秀

出帆の汽笛残して小春かな

白雲のなびく棚田の木守柿

名女優の寂しき訃報秋明菊

浜田紀政

廃校に合唱ひびく小六月

レシピ見て零余子飯炊く日和かな

日記帳今日の頁に紅葉押す

重野善恵

山茶花の崩るるやうに散る日向

長き夜を父母の思ひ出姉妹旅

ポケットの外れ馬券や神の留守

山元正規

通らせてもらふ畦みち里小春

短日の何も決まらぬ会議終ふ

冬めくや正倉院の五弦琵琶

森岡陽子

人波の頭上賑ふ熊手かな

木洩れ日にティアアラ輝く七五三

鐘楼のこはれし寺の帰り花

松本周二

温もりの居酒屋外は鯰起こし

幽玄の冬の始めの能舞台

魁夷の絵となりたる山の眠りをり

出迎への犬はロボット文化の日

山迫京子

七十路の背中丸めて冬に入る

投げ餌に鴨首延ばしキヤッチする

茶の花や惑星地球に白く咲き

今泉由利

まろまろし八ツ手の花の花あかり

海のもの山のものあり冬籠

炉話や津軽に京の古語のこる

今泉如雲

北からは鮭来て南からは鱒

階段に鳴り天井や冬館

末っ子のいつもはじっこ冬蒲公英

植村公女

初富士の見え隠れして箱根路

晴天や突き差している冬木立

一の滝二の滝涸れて七の滝

杉浦弘

むささびの屋根渡りゆく宵の内

朝の間にはらりとしたる淑気かな

一茶名句集より

神の灯や餅を定木に餅をきる

庵の煤風が拂つて呉れにけり

わんといへさあいへ犬も年わすれ

お仲間にも座るや年忘れ

かさね吟行会

「駒場公園」 十一月

田中清秀

長閑な雰囲気を醸し出していた。

百万石の茶の花日和たまわりぬ
燈籠の薄き龍紋冬に入る

正規
清秀

駒場公園は加賀藩の旧前田家第十六代当主前田利為（としなり）侯爵の駒場にある居宅跡である。侯爵がここに邸宅を構えたのは昭和の初めで、駒場農学校（後の帝大農学部）が本郷に移転した跡地を第一高等学校と分割して使用した時からである。洋館は外壁をスクラッチ

タイルで施され昭和四年に竣工、和館の方は少し遅れて昭和五年に完成している。日本には外国からの貴賓を迎える邸宅がないとの思いから、外人接待用の迎賓館として使用され社交の場としても優雅な豪邸であったと言われている。その後、一時は連合軍に接収されマッカーサーの後任のリッジウェイ総司令官の公邸となっている。接収解除の後、昭和四十二年から東京都の公園として開園、和館と敷地は目黒区が、洋館は東京都が管理している。

令和元年十一月八日晴れ、気温二十度の肌寒さもほどほどの絶好の吟行日和となった。イギリスのカントリーハウス風の意匠でまとめられた伝統的な洋館の正面には来客用の車寄せが張り出し、天に延びる尖塔が城郭のよう、バルコニー上部には羽根の生えたライオン像が置かれている。その前庭にはマテバシイの古木が横たわり

図らずも今日は、立冬に当たり使う季語も冬のものとなる。俳句は旧暦を使うため生活実感とは少しずれる。紅葉や銀杏並木の黄葉などまだ残っているのに、短い秋は一瞬に過ぎ直ぐに冬となった印象である。

外では美しい青空のもと、近くの園児達が元気に賑やかしい。素晴らしい自然環境のもと、楽しくそして贅沢な遠足だ。隣接する駒場野公園も桜の名所として有名で、ソメイヨシノをはじめオオシマザクラやケンロクエンキク桜など十九種が植えられている。また、小鳥たちを観察するバードサンクチュアリともなっており自然とふれあうことが出来る。

冬ぬくし子等歓声のお弁当
初紅葉私に散る君に散る

さち子
由利

館の紹介に戻る。まず洋館から、玄関広間は深緑の蛇紋石の柱とチーク材の梁、寄木細工の床、さらにシャンデリアで彩られ見事である。晩餐会が開かれる大食堂は最も格式が高く、中央には白大理石のマントルピース、周辺の壁には金唐革（きんからかわ）の黄菊模様で飾ら

れ豪華である。隣接して賓客をもてなす大小の客室や応接間が配され、座り心地の良さそうなソファーが置かれている。二階は侯爵家の私的な空間で、銀地に金色模様の壁紙の夫妻の寝室、書斎のマントルピースには龍のレリーフがあしらわれている。調度品の多くは東京国立博物館の内装も手がけた雪野元吉氏が渡英し、当時大使館付き武官であった前田侯爵と打合せをした上で特別に誂えたものと言う。

冬薔薇リτζウエイを偲ぶ邸

銀杏落葉の散り敷く並木どこまでも

陽子 京子

洋館と和館の間には、自然石の大きな石橋があり渡り廊下は中央の東屋を境に洋風と和風にデザインされ、自然に趣が変わる工夫がなされている。さらに外国の賓客をもてなす為に、大広間には二間以上ある床間と鳥居型の違い棚を置き、四十畳の客間と次の間を畳廊下で囲み、正面の池泉の庭には水が流れ、燈籠と景石を配し幽雅なものとなっている。招かれた人達は庭園を眺めながら落ち着いた雰囲気を楽しむ事が出来たであろう。

巨木林抜けて寒禽鋭き一声

ほつこりと茶の花咲くや坐禅堂

素山 周二

東京から北陸新幹線で最短二時間半の北陸の観光中心

地「金沢」には、ミシュランで三つ星を獲得した日本屈指の庭園兼六園や金沢城、武家屋敷と寺町寺院群など名所旧跡が多くある。豊臣家の宿老として秀吉から加賀・越中の国を賜り、百万石の基礎を築いた前田利家の城下町である。その利家は武将としてのイメージが強いが、意外に算盤が得意だったと言われており常に具足に愛用の算盤を入れていたとの記録が残っている。戦国の乱世を生き抜き、燦然とした文化都市金沢の基を作り出した遠因が得意の算盤にあると考えると何か面白い。

立冬の日の吟行は歴史的な考察も行いながら、贅を尽くした邸宅と素晴らしい自然を散策した後、句会は和館の一部屋を借りて行った。いつものとおり囁目三句出し四句選で行われ名句を披露して無事にお開きとなった。

かさね吟行会

日時 二〇二〇年一月十日(金)
場所 清澄庭園・句会・新年会
集合 涼亭に一時集合
申込 森岡陽子宛(03)3712・2835

『酔いの徒然』（九三）

丸山酔宵子

『佐賀の美酒銘酒居酒屋』

令和元年10月22日、天皇陛下が即位を国内外に宣明した「即位礼正殿の儀」が皇居・宮殿「松の間」で賑々しく行われたが、皇居・宮殿には来賓をお迎えする「竹の間」も素晴らしい。そこに置かれているのが、高さ153cmもある有田焼岩尾對山窯で作られた金襴手の大壺「緑地萌葱金襴手飾壺」。

今回縁があつて、その大壺を制作した岩尾磁器株式会社14代ご当主岩尾社長に会いに有田まで行った。その帰途、せっかく佐賀まで来たのであるから、鍋島藩のお膝元佐賀市内で一泊したのである。

佐賀と言えば明治の元勳、早稲田大学創立者である大隈重信。生家にある記念館を訪ね、学祖の張りのある肉声に感激し佐賀城堀横のニューオータニ佐賀にチェックイン。いよいよ佐賀の夜のスタートである。

佐賀は初めてであり伝手（つて）も無い中、ホテルのフロントに尋ねるのも良いが、最近はおっぱらグルメサイトの活用である。『佐賀市・居酒屋・魚・日本酒・佐賀牛・』で検索すると、出てくること出てくること。その中で4点以上の点数を獲得している店をチェックしてみると、4・4と高得点の「居酒屋ふるかわ」。素晴らしい日本酒の品揃えです。〆砂糖を一切使わず、素材の甘味のみで炊いた煮物は、味が染み込んで絶品でした。〆などと書き込まれていて、最早（もはや）躊躇なく予約の電話である。

「もしもし、これから伺いますが、席あいてますか・」
「・・ハイお待ちしています。タクシーには愛敬一番街と言ってください・・」晩秋の陽はつるべ落としのように一挙に暗くなり、枯葉の散る人通りの少ない街並みをさらに寂しくさせる。路地の一角の古びた廃墟風ビル2階にネオンがポツンと灯っている。

「・・お電話の方ですね。どうぞカウンターの大好きなところで・・」店内は古びて雑然としているが、カウンターには美味しそうな〆おばんざい〆が大皿に。

前の大型冷蔵庫には、見事に一升瓶の日本酒がずらり。「まずはビールください。えーつつ、エーデルワイスの生があるですか」「えー、これに拘って、昔から佐賀ではうちだけ・・・」

有明海の新鮮な魚の盛り合わせを任せると、ムツゴロウ、ワラスボ、シオマネキ、クチゾコなどの珍味のオンパレード。と、突然ママがおもむろに分厚い写真本を取り出して「片方の鉄だけでかい、これがシオマネキ：」色鮮やかで豪華絢爛の魚介類大辞典を楽しそうにそして誇らしげにめくってくれる。

「今日一番のお薦め酒は・・・」「そうですね、それじゃー、ホタルの郷の天山酒造の、大吟醸あわ雪天山、いい出来ですよ・・・」

ふと、カウンター奥の棚を見ると「太田和彦」の本が何気なく置いてあって「えー、かなり前に来店されました」やはり天下の居酒屋探訪家、その道の達人は流石！

枯葉散り街にネオンや佐賀の夜

酔宵子

楽しい時間 86

山本紀久雄

2019年11月30日

神にならなかつた鉄舟・・・その十六

結城素明の3冊の墓所関係書籍は前号で検討した。今号では「勤王書家」について書いた2冊と、これに関係する『行誠上人遺墨集』について検討する。

まずは『勤王書家菊池容齋の研究』である。菊池容齋(天明8年1788明治11年1878)とは、幕末から明治時代初期にかけての絵師。旧姓は河原。本名は量平または武保、別号に雲水无尺庵など。『前賢故美』の作者として広く知られている。91才没。

『前賢故實』とは、江戸時代後期から明治時代に刊行された伝記集。全10巻20冊。上古から南北朝時代(後龜山天皇の代)までの皇族、忠臣、烈婦など585人、これを時代を追って肖像化し、漢文で略伝を付したもので、日本の歴史上の人物を視覚化したものとしては画期的であり、明治中期頃から国家意識の高まりにつれ盛んに描かれた歴史画において、バイブルとしての役割を果たしたという。

歴史学者の平泉澄は著書『続山河あり』(立花書房 昭和33年刊)で述べる。

『私は年来之(注『前賢故實』)を尊重し、愛読していたのであるが、著者の菊池容齋その人については、多く知る所が無く、調べたいと思ひながら、調べるとよりもなくて、つい其の儘になつて

ゐるうちに、図らずも『勤王書家菊池容齋の研究』を著し、それを一部私にまでも寄贈せられたのが、外ならぬ結城素明書伯その人であった。それは昭和十年秋の事であつて、之によつて初めて容齋の伝が明らかになつたのである』

次は『勤王書家佐藤正持』である。佐藤正持(文化6年1809安政4年1857)は、江戸時代後期の画家。春木南湖・谷文晁に師事し、浮世絵もまなんで名をなす。国史に通じ歴史画を得意とする。西国を歴遊後、備中(岡山県)倉敷の医師石坂空洞宅に身をよせ、『皇朝画史』を制作した。江戸出身。通称は理三郎。号は北浜。49歳没。

素明は『勤王書家佐藤正持』の序(昭和18年11月9日)で次のように述べる。

《此の時(大東亜戦争)に當り、翻つて吾等は、嘗て明治維新の以前に於て、外夷撃攘を叫び、尊皇の大義を以て、皇道世界觀の顕現を念願したる人々の業蹟を回顧し、爰に其の一人である市井の書人佐藤正持の研究経過を公にする。正持は未だ殆ど世に知られてゐないが、併し勤皇書家として国史書を描き、畢生の大著『皇朝画史』七巻並に附録一卷を完成している》《思えば昨年春此の書完成の為に専念従事中、当時海軍軍医少佐として従軍中の長子貞昭は、南海に散つてゐる。此の栄光の日に此の書成り、無窮の聖徳を仰ぎ見て、貞昭の英靈に此の書を手向けんと欲する次第である》

前出・平泉の『続山河あり』は、『勤王書家佐藤正持』について次のように述べる。

《容齋の伝は明らかでなかつたが、その名は天下に喧伝してゐた。之に反して、正持といふ書家は、殆ど世に知られてゐない人であつた。しかるに素明書伯は、先ず容齋の伝を明らかにした後、次

に正持という人物をしらべて、之を世に紹介せられた。容齋は天明八年に生れて、明治十二年六月十六日、九十一歳の高齢を以て没した。正持は文化六年に生れたといふから、容齋よりおくれる事二十二年であるが、安政四年八月九日四十九歳にして没したので、容齋よりは二十一年前に亡くなったのである。且つまた容齋は、その大著『前賢故実』二十冊も、増上寺の福田行誡上人の援助により、篤志の寄付を得て之を出版する事が出来、その書は天覧に供せられて、特に「日本書士」の称号を賜はつたのに反し、佐藤正持の苦心して作った『皇朝書史』は、神武天皇の御代より始めて、慶長元和の交に及び、歴史の推移、忠臣勇士の事績を描き出した苦心も報はれず、遂に出版する事が出来ずに終つたのであるが、その不幸に同情し、その志に感じて、百万搜索して、その伝を明らかにせられたのが素明画伯であつた』

この増上寺の福田行誡上人とは、文化6年（1809）武蔵国豊島郡山谷に生れ、明治21年（1888）没。88歳。明治維新の神仏分離や廢仏毀釈の渦中であつて、仏教における戒律を復興し、旧来からの僧弊の二洗をもくろみ、内省持戒の生活を提唱し、かつその実践にあたり、世紀の大事業といえる『縮刷大藏經』の出版に助力した人物である。

なお、明治期の居士仏教者で内務省社寺局に勤めていた島田蕃根も、福田行誡らと『縮刷大藏經』刊行に携わっているが、明治9年（1876）に発した社会福祉法人福田会にも関与しており、この会には鉄舟も円朝も一時関わっている。（参照『福田会のあゆみ』社会法人福田会2015年）

行誡上人とは素明も関係があるようで、『行誡上人遺墨集』の「序」で、自らの関係について触れている。

『池田屋妙観と謂ふは余が祖父なり。当時本所荒井町に酒屋の

見世を開きゐたり。上人の書簡中に宛名を荒井町とのみ記しあはるは、即ち荒井町に住めるが故なり。維新前は質屋を業とし傍ら両替店をも合せ営めりと云ふ。姓を森田、名を周助と稱せり。祖父母の間には子がなく、余の母を育て養女とし、後ち父を迎へて養嗣子となせり。所謂夫婦養子なりしが、母は祖父の血縁の娘なりき。余は祖父の没後に生れたるを以て、幼少の頃祖母のみ達者なりしを知れり。此の祖父母が上人の信者にて、録中にも妙観は受戒の人なりと記され居り、上人より御袈裟を授与せられたる際の包紙の如きも家に伝はり』

上人と容齋の関係については次のように述べる。

『菊池容齋にして若しも行誡上人と相遭ふことがなかつたならば、其の不朽の名著『前賢故実』も或は其の刊行を見るに至らなかつたかも知れぬ。又行誡上人にしても若しも菊池容齋と相識ることがなかつたならば、其の護持供養の聖像五百羅漢の書幅も或は此の書人に依つて制作せられず又其の遺書中特に之を記す程の名作を世に伝えるに至らなかつたかも知れぬ』

筆者も研究書を何冊か出版しているが、本を著すまでには相当な研究が必要で、片手間ではできないようなものではない。画家である素明は本業の絵に投入する時間を削り、相当出版の方に割り振つたであろうが、なかなか出来る事ではない。

このように考察するならば、素明は絵画以外に、別の「何か」を求め続けていたのではないだろうか。そのひとつが尊皇精神の發揮出版であり、古の名人練達士の業績を現代の芸術界へ伝えようとする臺の出版であつたのだろうか、しかし、素明が求めていた「何か」の本質は、もう少し究明しないとわからない。次号も検討を続けたい。

絹の話 (110)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

絹の考古学入門 (その5)

絹と紙

紙の発明前

現在の紙は木材等のパルプから作られています。最古の紙(紙らしき物)は紀元前3000位前の古代エジプト王朝でパピルス(カヤツリ草の一種)から作られたといわれています。ヨーロッパでは紀元前2500年位前には羊皮紙が作られていたようです。

同じ頃、東北中国にも南部から養蚕技術が伝わって来ると、繭から糸を採った残糸で敷物や風呂敷の様な物が作られたと云われています。

また、紙といわれませんが、南太平洋の島々(トンガ、サモア等)で現在でも作られている「タパ」といわれる腰飾や敷物、壁材に使うクロスがあります。

それは木の皮を剥いで叩いて延ばし、ベニヤ板の様に、たて繊維とよこ繊維を相互にタロイモなどの糊で2〜3

枚は貼り合わせ、手描きや拓本で模様を描いた物です。これも紙に発展する過程の物ではないかと思われます。

いずれにしても人々が邑をなし、権力者が生まれ、生活を律する神事や、王の命令などを正しく伝える為の「文字」が作られなければ、紙はあまり必要に迫られる物ではなかったのではないでしょうか。

私が文字を持たない石器時代さながらの南太平洋の島(マレクラ島)の人々と生活した時、紙には誰も興味を示しませんでした。

日本でもつい最近まで木を紙の様に薄くした「うす板」が肉などの食料品を包むのに使われ、魚屋などではそれに品名値段などを書いて商いをするのが普通でした。簡単な覚え書き程度のものはなにも紙でなくても、木簡でもよかったです。奈良時代までは木簡も多く使われていたようです。

紙の発明：紙はなぜ糸ヘンか

紀元前3000年頃の中国の黄河文明当時の絹には撚りのかかった細い糸は作られておらず、権力者も庶民も手袖の太い糸で専ら寒さから身を守る物づくりが中心でした。それから千数百年を経て殷の時代になると、占いなどの象形文字が亀の甲に刻される様になり、文字が急速に発達して来ます。それは広範囲に権力が及び、王命

を正確に伝達する手段として、また賢人の言葉を広く流布し、国の道徳律を統一する為にも紙は必要欠くべからざる物になって行くのです。

権力者の為に均一な汚れのない上質な糸を作ればそれだけ屑糸が出ます。また使い古しの真綿（絮）なども出て来ます。それらをまとめて熱い灰汁湯で煮熟し、水にさらして不純物を除き、水の中でほぐし、叩いて均一にし、干して、「絲絮片」と云う一種の不織布が「紙」と云われようになりました。それはタバのように厚手の物で、敷物などに使われていました。

ある時、その敷物を作った後の水中に浮遊している細かな糸片を漉いて干した薄物も紙と云っていたようです。これが紙の始まりです。

その紙は軽くて持ち運びし易く、多くの情報を正確に記載でき、紙と文字は車の両輪の様に発達し、権力がその上に乗って強大な王朝が形成されて行く基になって行くのです。

周王朝の中頃には撚りのかかった薄絹も織られる様になり薄絹生地に沙汰書を書く様になりましたが、漢の時代になると周辺諸族の活動が活発になり、彼らに力を示し、慰撫する為にも上等な真綿（絛）を使って紙を作る事が求められて来ました。それは「絛糸」と云われる最上級の紙となって行きます。

紙は絹から作られたので、糸ヘンを書くのです。

さらなる紙の発展

中国の漢の時代になると樹皮や草木から紙が作られる様になりました。この大発見が今日の紙です。

シルクロードが開けて中国から紙がヨーロッパ、エジプト方面に行き渡ると、長き歴史の羊皮紙もパピルスも次第に姿を消して行きました。

技術革新は今も昔も熾烈なのです。

絹紙の現在の評価

亀甲文字の大家に絹生地に筆で文字を書いて頂いた事がありますが、書家はなにも言わずに作品を納めて下さいました。しばらく後、絹100%ではありませんでしたが、絹紙を作った会社があり、それを著名なひら仮名書家に平安時代の様なひら仮名をしたためて頂きました所、「この紙は筆がすすみ難い」と言われました。

絹紙は筆のすすみが和紙に近いと思っていました。専門家には和紙の方がよいと云う結果になりました。

絹紙は漢字には良く、しなやかなひら仮名には不向きなのでしょうか。紙は古代からの情報化時代を担って来ましたが、新たな電子機器による情報化時代にどの様な役割を果たして行くのでしょうか。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2019年12月6日

新しいウィルスの倒し方

寒くなり空気が澄んでいるためか

月明かりが綺麗なこの頃です

風邪のウィルスを小便で体外に出す

私が15年以上前から言っていることです

ウィルスが体内に入った時

発熱時

少し体調が悪い

回復期

かなり有効です

しかし

発病して大きく体調を崩してからだと

腎機能と内臓機能が低下する為

思っている以上の効果が出にくかったりします

調子が悪いと水分補給もしにくくなり

トイレも億劫になりますよね

もつと効率よく体内の菌を倒すことが出来ないか？

と考えたところ…

ウィルスを倒すのは発熱

血液の温度を上げるというのが一番効率がいいのでは？

とはいえ発熱は自分でコントロール出来ないですよ

そこで…

ゆたぼんの登場です

いつもは腸に当たっているゆたぼんを

肺の位置に当てることにより血液の温度を一時的に上げ

ウィルスを倒すという考えです

この方法と水分補給&小便で

あれっ？おかしいな？

と思ったりウィルスを倒していきましょ

2019年12月4日

うがい

気がつけば12月

分かっているのに理解できていない感じですよ(笑)

これから

忘年会や仕事やイベントなどで

かなり忙しい師走になれる方が多いと思います

風邪やインフルエンザに

感染している場合はありませんよね

マスク着用は基本として

顔やマスクの表面にイオンスプレー

唾液を多く出すためにガム

細目に水分補給(外出時は緑茶 うがいを兼ねます)

アルコールを携帯

などで防いで行きましょ

緑茶うがいは何年も前からお勧めしていましたが

自宅に帰ってきてからも緑茶うがいをお勧めします

水でうがいする場合は

の菌を出すために1-10回をゆすいでから

口腔内のうがいをしましょ

「江上浩二の独り言」25 江上浩二

朝鮮通信使・日韓関係改善へ

70年以上も前の第2次大戦も知らない、とつくに還暦を過ぎた実体験もないシニア世代が詳細にコメント出来る立場ではないが、久しく続いていて、平穏な空気があるかのきっかけで突然かき乱され、恐らく私を含めて知見の無い方が最近の日韓関係をどう思われているか、誰も関係を意図的に悪い方向へ導こうとは思っていないと信じている。

次に示す14年以上も前にまとめたマイブログに朝鮮通信使と題したものを読み返し、昨今の日韓関係を改善する行動への一助になればと思う。

この連休中（平成17年9月のお彼岸）に家で徳川時代に行われていた朝鮮通信使のことが書かれている本を読んだ。

朝鮮通信使は徳川家康が豊臣秀吉の犯した朝鮮への侵攻を謝罪し、二度と朝鮮を侵さないと約束し、国交正常化の証として、江戸時代に派遣されていたこととはご存知のことである。これは家康が秀吉の戦後処理を行い、自らの政権を確立した証とも言える。

読み続け、ある文にさしかかった時である。通信使の「通信」とはよしみを通わすという意味である。と書かれていた。ここで私は「はつと」した。20年も光通信に携わりながら、通信という日本語を一度も熟考したことが無かったのである。全く、反省すべきである。日本、いや、中国でもいつから通信という言葉が使われ始めたのか知らないが、通信 = Telecommunication とあまりにも結び付けすぎ、Tele + communication と考えれば、Tele（遠隔）を実現させるために、通信に利用している手段やハードのことばかり考えすぎていたことに反省した次第である。

よしみを通わす。漢字で書くとよしみは誼である。信、信用、信頼、思いやりを互いに通じ合わすこととも

読み取れる。IPメールでは伝達されるテキストだけにこだわり過ぎ、送り手、受け手の感じる「信」を無視していたことも反省した。これからは「よしみ」を通わすことが出来る言葉、文、文章を熟考しながらメールを送ってもいいのではないか。携帯だと複数の指先を魔術師のごとくすばやく動かせる若者の世界だが、私を含む50を越えた世代は熟考して言葉を選び、メールを送っても悪くは無いためであらう。

ただ、一方的に送りつけてくるメール (email)、ダイレクトメール (封書)、電話による (悪意でないが) 勧誘 (何か読まされているだけの商品説明のテキスト) は通信でないと断言できる。これらは伝送、伝達、連絡の類である。我々は山ほどの意味の無い伝送、伝達、連絡に埋もれそうである。事実埋まりつつある。今や、インターネットは光通信で支えられている。受け取っている電子メールでジャンクメールの割合が50%以上の方も多いのではないだろうか。光通信は光・通信であり、光で「よしみ」を通わす仕組みである。これまであまりにも光伝送にとられ過ぎていた。これからは本来の光・通信の精神に戻ってみたい。

対馬を経由して、博多、難波、東海道を通って、江戸に到着するまで朝鮮通信使は数ヶ月要したそうである。当時でも、飛脚、早馬であれば国書、親書で伝達、連絡はそれほど日数も必要ないであらう。誼を通わせる、相手に分ってもらえる誼は時間をかけて、運ばねばならない時もあるであらう。一般人は季節の贈答、お邪魔するときには持参する品、土産の類はよしみを表わすものと信じている。

光で「よしみ」を通わす仕組みと時間かけてでも、相手に十分「よしみ」を受け入れてもらえる都合の良い仕組みを同時に実現出来れば、IPメール、ショートメッセージ、ライン (加筆、令和元年11月) でも許されるであらう。

平成17年9月23日記す

とかく、近くににいる者同士や身内の喧嘩や争いは執念深い。日韓は全くの異文化、異民族間の関係ではなく、やはり近い関係者間なので、仲直りの契りを結ぶのも普通的手段ではだめだろう。現代版通信使とはいかに。

漢詩研修 (三十九)

千代田岳精会 平井茂行

偶たま たま | ま
 解かい かい | い
 す しゅん ふう の い
 春風意

来きた きた | り
 吹ふ ふ | く
 竹ちゆう ちゆう | と
 蘭らん らん | と
 蘭らん らん | と

幽ゆう ゆう | 居
 居きよ きよ | 居
 人ひと ひと | 到
 到いた いた | ら
 らら ら | ず

独ひと ひと | 坐
 坐ざ ざ | して
 衣ころも ころも | の
 寛ゆる ゆる | や
 寛か か | たる
 覚おぼ おぼ | ゆ

自じ じ | 画
 画が が | に
 題だい だい | す

夏なつ なつ | 目
 目め め | 漱
 漱そう そう | 石
 石せき せき | 石

【作者】夏目漱石《一八六七（慶応三）年～一九一六（大正五）年》

明治・大正時代の小説家・英文学者。名は金之助。漱石はその号。慶応三年一月五日、江戸牛込馬場下横町（新宿区牛込喜久井町一）に夏目小兵衛直克の五男として生まれた。母千枝は後妻で四谷大番町の質屋の娘であった。明治十一年、東京府立第一中学校入学、十四年に退学して二松学舎に入り漢学を学んだ。十六年に私立成立学舎にはいつて英語を学び、翌年大学予備門予科に入学。二十二年に正岡子規と相知り、文学に対する興味をもつに至った。二十三年、東京帝国大学文科英文科に入学。三十三年、文部省留学生としてロンドンに出発。三十五年九月ごろから、強度の神経衰弱に陥り、文部省内に金之助発狂が伝えられたりした。三十六年帰朝、東大英文科・第一高等学校講師となった。三十八年一月から、「吾輩は猫である」を「ホトトギス」に掲載。そのほか「倫敦塔」、「カーライル博物館」、「幻影の楯」、「琴のそら音」などを発表。三十九年にはいつて、「坊ちゃん」、「草枕」などを発表。四十年朝日新聞社入社。入社第一作「虞美人草」の連載を始めた。大正三年には小康を得て「こころ」を書き、五年に「明暗」の連載を始めたが、胃潰瘍が悪化して内出血を重ね、十二月九日「明暗」未完のまま五十歳で死去した。

【語釈】

※幽居・・・俗世間を避けて静かなところに隠れて住むこと。世俗を離れた静かな住まい。※不倒・・・訪れる人もいない。※覚・・・知る、感じる、という意。※衣寛・・・着物が、ゆつたりとしていること。くつろぐさまをいう。「解帯」（ゆるい帯）という語もある。宮仕えで衣冠束帯を正すのとは正反対に、隠居自適の暮らしを表わす※偶解・・・はからずも、このとき理解することができた。※春風意・・・春風のこころ。

『深川界限』

中屋保之

「芭蕉庵を見ずして芭蕉を語るなかれ」という訳で小春日和のある日、深川界限を、当刊の編集・発行人のお一人である今泉由利さんのお勧めもあり、清澄庭園から芭蕉記念館辺りを訪れる予定(・・)でいつもの行きあたりばったり好きの幼馴染二人と共に出かけた。腹が減ってはなんとやらで、門前仲町の「宇田川」で昼食を摂る運びとなった。少々時間があつたので、深川不動堂と富岡八幡宮に寄ってみた。同行の二人は初めてとのこと。私は久しぶりの不動さんのお不動さんの新本堂に仰天した。



深川不動堂は、千葉県成田市にある大本山成田山新勝寺の東京別院である。古くより「深川のお不動様」と親しまれており、その開創は元禄16年と伝わり、成田山の本尊を江戸に奉持し特別拝観したことに始まるという。「深川不動堂」の名のもとに堂宇が完成したのは、明治元年(1868)に神仏分離令とそれにもとづく廃仏運動から13年後の明治14年(1881)のことという。
 富岡八幡宮は、通称「深川八幡宮」ともいう。江戸最大の八幡宮で、8月に行われる「深川八幡祭り」は江戸三大祭りの一つ。また江戸勲進相撲発祥の神社で、境内には「横綱力士碑」をはじめ大相撲ゆかりの石碑が多数建立されている。
 《上》深川不動尊旧本堂
 平成23年4月までの本堂
 《中》同新本堂
 開創310年記念事業として建立された新しい本堂
 《下》富岡八幡宮

あさりの天ぷらが絶品。さすが深川である。

その深川についてであるが、「新編武蔵風土記稿」は、深川の開發と地名の由来について、次のように述べている。「撰津の国(大坂)からこの地に移り住んでいた、深川八郎右衛門という名の者がいた。徳川家康がこの辺りで獵(かり)をするに当たって、八郎右衛門に地名を尋ねた。まだ定まった地名もないと答えたところ、然ラバ汝ガ苗字ヲ以テ村名トナシ起立セヨトノ命ニ、より、慶長元年より新開の地として深川村と唱えるようになった。このように、江戸の初期(慶長年間)から深川八郎右衛門が、堅川以南、小名木川以北(現在の森下付近)を本拠に、土地の埋め立てを始めたのが深川村の興りとなったとされている。

このほか、当時深川の土地開發に努めた主な人物として、小名木川という川の名で残っている小名木四郎兵衛、千田町を開発した千田庄兵衛などがいる。(参考文献「深川警察署百年史」)

昼食のはずが、「ビール一杯だけ」からお酒、焼酎へとお定まりのコース。初期の目的を思い出し、門仲(註)門前仲町の通称)から清澄庭園へ向けて出発した。紅一点のYさんが、下町情緒の濃い商店を覗きながら「深川伊勢屋」できんつばを購入、ナビ役のKくんが携帯で庭園までの地図と格闘、私はそんな二人をスナップしながら初冬の日の暖かさを楽しんでた。数軒先で大



深法乗院えんま堂は、寛永6年（1629年）深川富吉町（東京・江東区）に創建され、同18年に現在地に移った。開山は覚誉僧正、本山は十一面観音で有名な大和長谷寺である。当山は、弘法大師四国八十八ヶ所霊場の写し霊場として、江戸時代中期の宝永年間（1751-64）に江戸に設けられた御府内八十八ヶ所の第74番目札所であり、江戸三えんま『深川えんま堂』として古くから人々に親しまれてきた。江戸の時代には、当山正面に通じる道にえんま堂橋（史跡）が架けられ、現在の清澄通りがなかった当時は、深川の中心道だったと伝えられている。

学芋を三人分注文、店のおねえさんにたつぷり蜜をかけてもらい後の楽しみとした。清澄通りを歩いてみると、やけにお寺が目につく。中でも、ひと際大きな看板に「日本最大の閻魔大王座像」とある。早速拝観に立ち寄ってみた。真言宗豊山派の寺で、「賢臺山 法乗院」通称深川えんま堂として、江戸の昔から庶民に親しまれていたそうである。全高三・五メートル、全幅四・五メートル、重量一・五トンの寄木造りだそうで、しかもこのエンマ様の前に、「家内安全」、「交通安全」、「夫婦円満」、「合格祈願」、「合格祈願」、「ばけ封じ」、「いじめ除け」など十九のご祈願が別個に記された、賽銭の投入口が用意され、自らの希望するご祈願に賽銭を入れると、仏様の様々な説法が音声で流れるシステムになっているそうである。

深川えんま堂を後にして清澄庭園へ向かうと、通りの先に黄色く色づいた銀杏の木が見えてきた。庭園の入り口に向かう途中にある深川図書館が、また好い佇まいを見せてくれる。都内でも日比谷に次いで二番目の歴史を誇る図書館だそうである。現在の建物は、平成五年に大正モダニズムを取り入れた三代目になり、周りの木々の緑に溶け込んでいる。

今日の目的地の一つ、清澄庭園は、都立庭園であることから我々は半額の七十円で済む。江戸時代の大名庭園に用いられたという、泉水、築山、枯山水を主体とした「回遊式林泉庭園」で、明治の代にも受け継がれ清澄庭園で近代的な完成をみたそうである。（参考文献 東京都公園協会）一説では、庭園の一部は紀伊國屋文左衛門の屋敷跡とも言われている。

享保年間（一七一六〜一七三六）には、下総国関宿の藩主・久世大和守の下屋敷となり、その頃にある程度庭園が形づくられたようである。明治十一年、岩崎弥太郎が、荒廃していたこの邸地を買い取り、弥太郎の亡きあと、隅田川の水を引いた大泉水を造り、周囲には全国から取り寄せた名石を配して「回遊式林泉庭園」が完成したそうである。銀杏の黄いろ、紅葉の赤に、池の亀や鴨にひなたぼっこに癒されたひと時を、よき輩よきからと大学芋をかじりながら満喫していた。庭園内を文字通り回遊して、「古池や」の句碑を前に心の中で（池がない！）と呟きながら芭蕉庵跡に足向け、芭蕉稲荷や隅田川と小名木川の合流点にある芭蕉の座像と対面はしたものの、少々時間が足りず再訪を約して家路についた。

悔るなかれ、深川！

卓上たくじょうの花はなを見て感かん有あり

横山精真

眼前がんぜんの卓上たくじょう 小瓶しょうへいの花はな

質朴しつぽくたる寒斎かんさい 一点いってん奢しやなり

品性ひんせい憐れむ可べし情趣じょうしゆの芸げい

凝然ぎょうぜん相对あいたいして 赏心しょうしん加くわわる



(語釈) ○小瓶・・・こびん ○質朴・・・飾り気のない。○寒斎・・・物寂しい部屋。○奢・・・奢侈、ぜいたく。

○品性・・・ひとがら。○憐れむ可し・・・立派な事よ。○情趣・・・おもむき。○芸・・・才能。○凝然・・・じつとして動かぬ様。○賞心・・・景色をめぐる風流な心。また、広く物を賞美する風流な心。

※この日は本部教室で一般向けの研修会だった。吟じた詩は「蘇軾の中秋の月」だった。皆しみじみと味わい吟じたようであった。研修が終わって、私は自分の部屋に戻り、事務処理に精を出した。私の机の前には小会議用の机が並べられている。仕事が終わった、八時過ぎ、さあ帰ろうと椅子を立とうとした時、気付いた。目の前の会議用の机の上に花が小瓶に飾られて置いてあった。それは飾り気のない、部屋にイキルものであり、安らぎを与えていた。花を飾った人は誰であろうか？その人柄の品性は立派なことよ。私は暫く是をじつと見つめて殺風景な部屋で風流な心を楽しんだのである。

中秋の月

蘇軾

軾

暮雲收盡清寒溢

銀漢聲無玉盤乾

此生此夜長好

明月明年何處看

萬葉秀歌の鑑賞

津之地直一

吉野なる菜摘の河の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして

吉野爾有 夏実之河乃 川余杼爾 鴨曾鳴成 山影爾之弓(③三七五、湯原王)

(口訳) 吉野の菜摘川の川の淀に鴨の鳴いている声があるよ。山かげになったところで。

湯原王は志貴皇子の御子。菜摘は今も吉野宮滝の東にその地名が残って居り、この辺で吉野川を菜摘の河と呼んだのである。注釈には「菜摘のあたり吉野川は彎曲して瀬あり淀あり、岸に近く竹藪などもあり。この作の趣をさながらに味はふ事が出来る」と説明されて居る。「鴨ぞ」と係って「鳴くなる」と結んで居り、実はこゝで詠歎の「なり」で句切れになっているのである。

「山かげにして」は「山かげにて」の意で、川淀の説明句である。そのことは「吉野の菜摘川の山陰の川淀に鴨が鳴いている」という平叙散文と比較して見るとよい。景いかに鮮明、清新でさながら優美な自然画の中に鴨の鳴く声も聞えるような思いがする。一首中に「な」の音と「か」の音を繰返した声調も気持よく、莊重典雅な氣品があふれて居り、万葉佳品の一つたるを失わない。

軽の池の浦みゆき廻る鴨すらに玉藻の上にひとり寝なくに

軽池之 汭回往転留 鴨尚爾 玉藻乃於丹 独宿名久二(③三九〇、紀皇女)

(口訳) 軽の池の浦回を行きめぐる鴨でもやはり藻の上にひとりでは寝ないのに――。

譬喩歌の部にある。紀皇女は天武天皇の皇女で穗積皇子の同母妹に当る方。譬喩歌は殆んどが恋歌と同じ内容を持って居り、この歌も、あの鴨でもただ一羽で寝るといふことにはないのに――私はただ一人で寝なければならぬとは、本当に淋しいことだと女らしい歎きが出ているのであって、対詠的な御歌である。恋人に高安王があつた趣

だから、王が伊予に左遷された時の御作ではないかとも思われる。又卷二に弓削皇子の紀皇女を思う歌四首（一一九—一二二）も出ていることもこの歌に關聯づけて考慮される。

百伝ふ磐余の池に鳴く鴨をけふのみ見てや雲隠りなむ

百伝 磐余池爾 鳴鴨乎 今日耳見哉 雲隠去牟（③四一六、大津皇子）

〔口訳〕磐余の池に鳴いている鴨を見るのも今日を最後として、自分は雲がくれ去って（死んで）行くことであらうか。大津皇子は天武天皇の御子で、天皇崩御の後、謀反を謀られたがその事發覚し、朱鳥元年十月三日に詔語田舎に死を賜わった。時に年廿四、その時「磐余池の般に涙を流してお詠みになった歌」がこの一首である。「百伝ふ」は「数えて百に達する」の意で「五十」にかけ、それと同音を持つ「磐余」にかけた枕詞である。「百伝ふ八十の鳥廻」の例もある。また同類の枕詞に「百足らず」がある。磐余の池は人工池であったがその所在地は今日いずことも不明である。池之内（桜井市）、その西に池尻（檀原市）の名があるところから桜井市の西南部、香具山の東北あたりかとされている。死に臨んで無心に鳴く鴨を見つめている。そしてそこに己の心を託して詠んでいる。後世の所謂「辞世歌」などになると、大げさな勇ましい概念歌等が多いのだが、万葉人はやはり即物的具象的であり、それだけまた実質的人間的であったと言つてよい。死を前に万感胸に去來する複雑な感慨を鴨という具象に集注し、それを「今日のみ見てや」と現し身の最後のはたらきを視覚に絞っている。一見平凡簡潔なこの表現の中に却つて切実な人間感情が籠り、それを受ける結句の「雲隠りなむ」が、あたかも体言止めの如き重量感をもつてそれを受け止めている。悲痛極まりない感情をぐっと押えて、自然の一点（鴨）を凝視している作者のぴんと緊張した精神が吾々の心にも響いて来るではないか。皇子については「及長弁有才学、尤愛文筆。詩賦之興自大津始也」（持統前紀）「状貌魁梧、器宇峻遠。幼年好学、博覽而能属文。」（懷風藻）等ともあり、その懷風藻にはこの歌と同じ時の作として、五言臨終一絶「金鳥臨西舎、鼓声催短命。泉路無賓主、此夕離家向」を伝えて居る。またこの時、妃の山辺皇女は髪をふりみだし、はだしになつて刑場に走り、皇子の死に殉じ、見る人皆すすり泣いたとその感動的場面を書紀は記している。

書齋の窓から

夏 目 勝 弘

一日二時間は書齋に座っている。時どき窓の外に目をやり、目的もなく眺め、目に映る物体を見ている。

その物体の一番に多いのは、小鳥たち、今年になって大きく変化したのは、今まで親しんできた小鳥たちの姿が見られなくなつてしまった。

原因は、五十メートル前方にあつた、樫の大木が伐られてしまったことである。

一年中常に巣作りをしてヒナを育てていたキジバトの姿が見られなくなつてしまった。

カラス等から卵を守るために、広葉樹の繁つた大木が巣作りには大切な条件であつたと思う。

キジバト（別名、山鳩、ツチクレーバト）キジバトは年に二、三回卵を孵す、多い場合は四回のこともある。

そのためかキジバトの巣は粗雑の巣が多い。なかには、100本以上の小枝で作つた巣もあるという。キジバトにも個性があるらしい。

巣材を運ぶのは雄、雌は巣を作る場所に座り込んで、雄から受けた巣材を腹の下に差し込んでゆく。

ハト類はビジョンミルクで雛鳥を育てるため、年に二回、三回と卵を生むのだから。

ビジョンミルクは人間の乳に比べて脂肪とタンパク質が多い糖分はない。ミルクに含まれている水分は親の体内の水分を使うため、ハト類は水分を得るために頻繁に水を飲まなくてはならない。

ハト類は水を飲むとき鼻孔まで口嘴を水のなかまで差し

込み短時間で水を吸い込み補給する。

繁殖期以外は植物食、ヒナが育つためにはタンパク質が必要なため、イモムシなど昆虫類を、日中の大部分は食物を得るため、ひっきりなしに巣に入入りする。

樫の繁みに出入りするキジバトをいつも見ていたが、今ももう樫の木は無い、少し淋しく思っている。

二月のウグイスに始まり夏の蝉、特にヒグラシの鳴き声を一度も聞かず、秋となり庭の叢に鳴く虫の声も聞かず、立冬となつてしまった。

反面、異状に繁殖したのは、マツクイムシである。サザンカ・ツバキはことごとく葉を喰いつくされてしまった。

なんとなく平年と違う現象が多く見られた今年であつた。万葉集では小鳥たちをどのように短歌のなかに捉えているのであろうか。

○夏山の木末の茂に霍公鳥鳴き響むなる声の遥けさ 大伴家持

○百済野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも 山部赤人

○桜田へ鶴鳴き渡る年魚市潟潮干にけらし鶴鳴き渡る 高市黒人

○朝鳥早くな鳴きそ我が背子が朝明の姿見れば悲しも 詠み人知らず

俳句はどうだろうか
向きあふて鳴くや鶉の籠二ツ 正岡子規

○行々子大河はしんと流れけり 一茶

○追ひすがり追ひすがり来て四十雀 石田波郷

○五月雨に鳩の浮巢を見にゆかん 芭蕉

○夕風や垂穂にあるく片鶉 飯田蛇笏

「氷魚」のことから (228) 岡本八千代

陸奥乃蔵王山竝爾ある雲能比ね毛須動き春たつ良し毛

茂吉

この歌は、第十四歌集「霜」所載の歌で、昭和十七年「新年頌」の五首中の三首目に収録されている。「霜」は、昭和十六年と還暦を迎えた昭和十七年の作品八六三首を収めた歌集である。昭和十六年の四月に佐渡に旅行し、越後の弥彦山に登り、翌年には五月還暦記念に笹谷峠越えをしたと言われている。

歌集には、「みちのくの蔵王山なみにゐる雲のひねもす動き春たつらしも」とあるが、色紙には万葉仮名や変体仮名などを混用して書いてあるとも言われている。

茂吉は昭和十五年に『柿本人麿』の論考を完成し、人麿の重厚で沈痛な声調に傾倒していたと言われている。この歌の歌意は、

「みちのくの蔵王山に連なる山脈の上にたむろしている雲が、一日中移動しているのが見える。それから推しはかるともう春になったことだなあ。」……と。

「写生」したものを心に感じて心を動かしている。なあーんだと思うような単純化の中に自分の心を動かしていると思う。ところが現代短歌は、それではもの足りないような気がしないでもないかも。

他に、歌集「霜」の歌三首拾ってみる。

しづかなるものにもあるか木間にて落葉のうへに照りかへすみづ

朝鮮の舞のちひさき冠よ健康なる女体の額のうへに
どろろきは海の中なる濤にしてゆふぐれむとする沙に降るあめ

「ゆふぐれむとする」ものはふつう、大地であり、空であり、風景全体であると思うに、それが、漠然とした対象のものでなく、強引にも「沙」にふるあめとするところにすばらしさがある。と思う。

いずれにしても、茂吉は、「アララギ」にとつてはなくてはならない人となった。それも、正岡子規の歌集を読んで、強い感銘を受けたのであった。医者になるために、東京帝国大学医科大学に入学したにもかかわらず、翌年伊藤左千夫に弟子入りしたのであった。はじめの、「馬酔木」に投稿を始めたのであったが、明治四十一年（一九〇八年）の「アララギ」創刊号にも作品が掲載されたのであった。茂吉は精神医学を専門として、もたわれてきた斎藤家の病院の医師としてその後継者としての責任ある仕事の主として、しかも、「アララギ」の歌の道を勉強して、力を尽していった人であった。かくして、その処女歌集「赤光」（大正二年）を世に出したのであった。

「赤光」は明治三十八年から大正二年の間に詠まれた八百三十四首の短歌からなっているのであった。心したいものをつくづく思いつつ――。

編集室だより【二〇一九年十一月】

今泉 由利

○新聞の記事にみつけた。『絵因果経』上品蓮台寺本は、インドの小国で、その国の太子として裕福に暮らしていた釈迦が出家を志す巻。『過去現在因果経』経文の内容に対応する仏伝を絵画化したもの。釈迦が前生において普光如来に師事。成仏の予言を受けて、この世に生まれ、現世の伝記を自伝の形式で述べたもの。インド僧で中国・南朝の宋に渡来して訳経僧となった、求那跋陀羅による漢訳であると。

○いつまでたっても、何が何だかわからないのだけで、根気良く導いて下さる指導者に甘え、漢詩というを、自分で作ってみようとしている。仏像彫刻クラスで、釈迦如来座像を二年がかりで彫りあげた。この経験を、自作漢詩に。

親迎釈尊

幽庭古木小齋中

懷抱博枝瑞氣籠

刻刻渾身吾意適

仏陀発処寸心忠

詩吟の会の「恩習会」があり、自作の漢詩を独吟してしまつた。今、ちよつと恥ずかしい。

○飛鳥山薪能in北とびあ

狂言二人大名 通りの者 野村万作

大名 高野和憲

大名 野村萬齋

能・平維茂 森 常好 大鼓 柿原弘和

太鼓 梶谷英樹

小太鼓 観世新九郎 笛 一増隆之
何から何まで…とてもとても興味深く、奥深く 去年は飛鳥山頂での夜空のもと…でしたが、雨が降りだして、中止。今回は、ホールの中での万全。自然現象の中での薪能がよかったなあ。

○旧芝離宮恩賜庭園へ俳句の吟行。

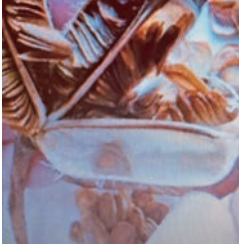
以前、浜松町に、アルゼンチンと日本とをつなぐ事務所があったから、とにかく良く行くところだったのに、びつくり変貌。高層ビルに囲まれてしまっていた。江戸、明治、大正時代から続く歴史、文化、自然を備え、やさしく、気品の庭園に、私達十人ほどが居るばかり、一步一步の木々草々、石組、築山…池…。ふつくら雀が何十羽…。芝で何やらついばんでいる。ほんとに近くにいるのに、逃げてはゆかない。ゆりの花が沢山咲いたのだ！枯れて立つゆりの種鞘が林立。ゆりの羽をもつ種は、いったいどこへ飛んでいったのだろう。

中国の杭州の西湖を模し、霊山を模した蓬萊石組、美しい松達は菰巻きをほどこし、寒梅も咲いていました。紅葉の木々、常緑の木々。みんな混ざって、みんな美しく、みんな気高く、これが日本。清々しい心になれたのでした。

○大崎・O美術館。

仏像彫刻。二年毎に展覧会をする。この日があるから、角材から仏様が出来上ってゆく。そして、また新しい角材に取り組む力が湧いてくる。仏様が出来上るのは感動です。途中、仏様と沢山沢山お話をします。出来あがると、頼もしい存在になっておられます。

野菜・果物・まんだら (23) ユリ根 ユリ科 ユリ属



- ユリ根はユリの球根(鱗茎)
- 食用としての、ユリ根の旬は11~12月。小鬼ユリ、鬼ユリ、山ユリ、鹿の子ユリ…。
- 中国では古代から、食用にされ、滋養強壮など、薬として利されてきた。
- 日本では、江戸時代に入ってから、ユリ根が食用にされた記録があり、1697年の「農業全書」にユリ根の栽培方法や食べ方が紹介された。
- ユリ根のビタミンCは、デンプン質で守られているので、熱で破壊されにくい。カリウムの含有量が多い。カリウムは塩分の排出を促し、血圧の上昇を抑える働きがある。結核菌などを消滅させる免疫機能を調節し、癌を抑える作用もあることがわかってきた。筋肉の働きを良くし、不溶性食物繊維が豊富に含まれ、便秘の改善に役だつ。
- 奥多摩の山を尽くしてユリの花が咲くのを見たことがあり、このごろ「なぜユリの花が咲かなくなったのか?」と質した時、猿がユリ根を掘って、食べることを覚えてしまったとか!そして、奥多摩に、ユリの花が咲かなくなった。もう、回復出来ているかな! だめかな!
- 鱗片を外側からはがし、沸騰した鍋に塩少々、1~2分茹で、好みにいただければよい。白さ、ほろ苦さ、上品さ…大好きだ。

今泉由利



「三河アララギ」について

- ◇三河アララギ発行所 〒一四・〇〇二二
東京都北区王子本町一・二六・六・A
- TEL (〇三) 五九二四・二〇六五
- ◇URL <http://imazumiyuri.jp/>
- E-mail yurimaizumii@jcom.zaq.ne.jp
- ◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子
- ◇三河アララギ誌は毎月発行します。
- ◇会員・今までで会員の方。希望される方。
- ◇会費制 廃止。
- ◇新しく購読を希望される方 一ヶ年五千円。
- ◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九
- ◇原稿送付先 〒一一四・〇〇二二
東京都北区王子本町一・二六・六・A
今泉由利 宛
- ◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。